兎道川両岸一覽 乾

ル 4
3762
1

門 ル4
3762
1

一覽

はのうえまで風よ吹とも茶
を摘まこゝ切りるよしやま
りまい子神を世をうちぢ
ゝ子つゝくむ
見事
ゝ摘やとまろしむ

年の秋ものゝはなを萩を
初紫を時雨まゝ今をゝや
このうち世界を
こゝ世をもゝも昔のゆゝ
やまゝ播のゆふへのをゝ乃破

乃ゆゝ雪
ゝ程ゝゝるほゝひゝ者ゝの
かゝゝゝこゝ也ほゝむ今
ゝゝゝひゝきゝく老ゝれ
ゝよゝ一ゝひのゝゝまゝゝ

ひとしらの木はえをあまたせもとへるる影のほとをるる
世世は里はかるることのそ
うしとへいとをつつしそ
久々をひかるまはるしの柴

月のしらつ屋そのに
高石る屋のひそ

芳樹

新古今集

いつ〻〻の秋を渡る雁の涙に
とゝも寒よ物思ふ宿の
世界帰年

寂蓮

伏見　山城国紀伊郡より京師の南行程二里日本紀に俯見と書り和歌に
呉竹のふしみの里とよめり山里野沢なるべし
此地は往昔隴々たる野径にして所々に民村九郷あり　船戸村　赤井村　桑村　清水村
石井村　北尾村　北内村　文禄三年豊臣秀吉公御在城より町小路建つづき
山村　即成院村ともいう
諸侯邸第諸職工人商賈軒を列べ西國より関東北國へ趣く唯口の
地となる　町数二百六十余町　舎屋六千二百余軒　城南第一の繁華なり
京橋　伏見の南方にあり北詰と京橋町南詰と表町なり橋行二十二間北詰は
御高札場あり北東の角に城里の如き埃樓あり古城の遺風なるべし
當橋の辺りは浪華より京師に上り下りの通船批石今井船或は傳道
の荷船ありて夜となく昼となく出入の船々間断なく且都と通ふ
高瀬船宇治河下り柴舟かぞへ尽て暮なく川辺の宿屋に旅客を止て
下船とともに船上より度とるべし其賑ひ言んかたなし殊更諸侯の御着
あれば往来街に充満して完も鳴のごとく如し
蓬莱橋　京橋の上南濱町より中書島に架し橋の長サ三十二間幅二間此橋とも
京街道の往還にして上下の行人ひきもきらず賑ふ
船上の旅客京師に到りて各其勝手に任せて同じかたぶくもの
凡此橋條と北へ趣き下板橋通に至る　右の方は行田の左は行田の石垣
是より右へ五町許行て京町通に出それより北へ墨染とすぐに藤の杜
深草稲荷社と経て京に入是と本街道とのひ或は伏見御茶屋俗ふ

稲荷街道も号に又此所より左へとして下板橋を渡りて車道に出
北に上る是則東洞院通にして竹田街道にて西六條に趣くものハ
六軒茶屋の南の方より西に竹田村とすぐ稲荷の御旅所
より油小路通にいづる俗にいふれと西竹田道とも
今富橋 京橋の南の濱より中書嶋に架し橋行十八間幅一間六尺一寸
此西詰に船宿軒とつらなりハ此中書島の
中書島 蓬莱橋の南にあり文禄年間向島に里ときづくりなりしが慶長のちぬめ伏見の城と共に滅亡せり
地名にいふ
此地ハ年々荒廃の地となりて後世遊女町となりて古へのこ
ゝに神侍に準へ後客の船とぬめ嬶娟なる妓婦ハ柳の陰に艪と
やぐらに花の下に袖と翻へし歌舞吹弾の音たゆる事なく別に
上りの水主船長ハ淀河の岸と憩ひるるべし
辯財天社 中書嶋に真言宗にして醍醐三宝院に属し長建寺と号し弁財天の
尊像ハ弘法大師の作なりと言へり修験道なりしが宝永年中
隆心和尚今の如く再建せり毎歳六月廿五日ハ當社の祭礼にして式場の盛ひ
言へんなきなり所謂大祓日なり
伏見陵 宝来ぐの東元材木町松林院の後に位
院信子の墓なり内大臣藤原信定公の女にして後花園院の皇妃嘉楽門
松林院ハ陵より後の建立にして
今浄土宗百万遍に属ス
平戸橋 元ざい木町の東にあり北詰と弾正町南詰と平戸町とにあり又平戸西
の裏手と弾正島とに接ス伏見の城のあり時平戸町ハ肥前の
松浦家のやしきに有り故に弾正町弾正島ハ浅野家のやしきに有りしなんと
当所にハかゝる遺名の地多し

劔崎稲荷祠　平戸橋の南詰より此西へ宇治川のぶれ彈正ヶ丘とさしたるんで左右に分れ流るゝ遠来樂しくとゝろとゝ

稲荷の神号と八千代明神と称し霊験いちじるして洛人平日の間断

なく赤の鳥居幾許とゝ建列せ社頭に數株の櫻ありて弥生

の花盛ゝに殊更に美観なり原より此地に宇治川の中間に築出せ

し橋にて東に豊後橋長さ七百左に指月の杜右に向島巨椋の入

江渺々として月影流水に漂ふ光景雪の朝の眺望又絶勝なり

豊後橋　平戸橋の上にあり向島に當る第一の大橋なり長サ百十間北は紀伊郡南は久世郡に属し辺に大友豊後守のやしきあり

北詰と豊後橋町に伏見院皇居の時は桂橋と云ひ指月の縁にちなむ

べし此北に隣りて玄蕃町に是も石川玄蕃頭

又は山口玄蕃頭なるの第にして遺名なるべし南詰と向島とに旅宿

貨食家諸商賈の家建つゝき堤なり秀吉公の

豊後橋の南詰向島と古へ大和御道に新堤なり秀吉公の

きづきたまへる俗に太閤堤と云大池の眺望佳景なり

巨椋堤

此地にいたりて船にて渡りて植堤巨椋堤なる初へ宇

治川の流落入て西の方伏見川淀の東にて木津川と合し

渺々たる一面の入江なり故に大和にいたる街道は木幡の里

にて岡之屋と経て宇治橋と云ふ一の坂と越て巨椋の

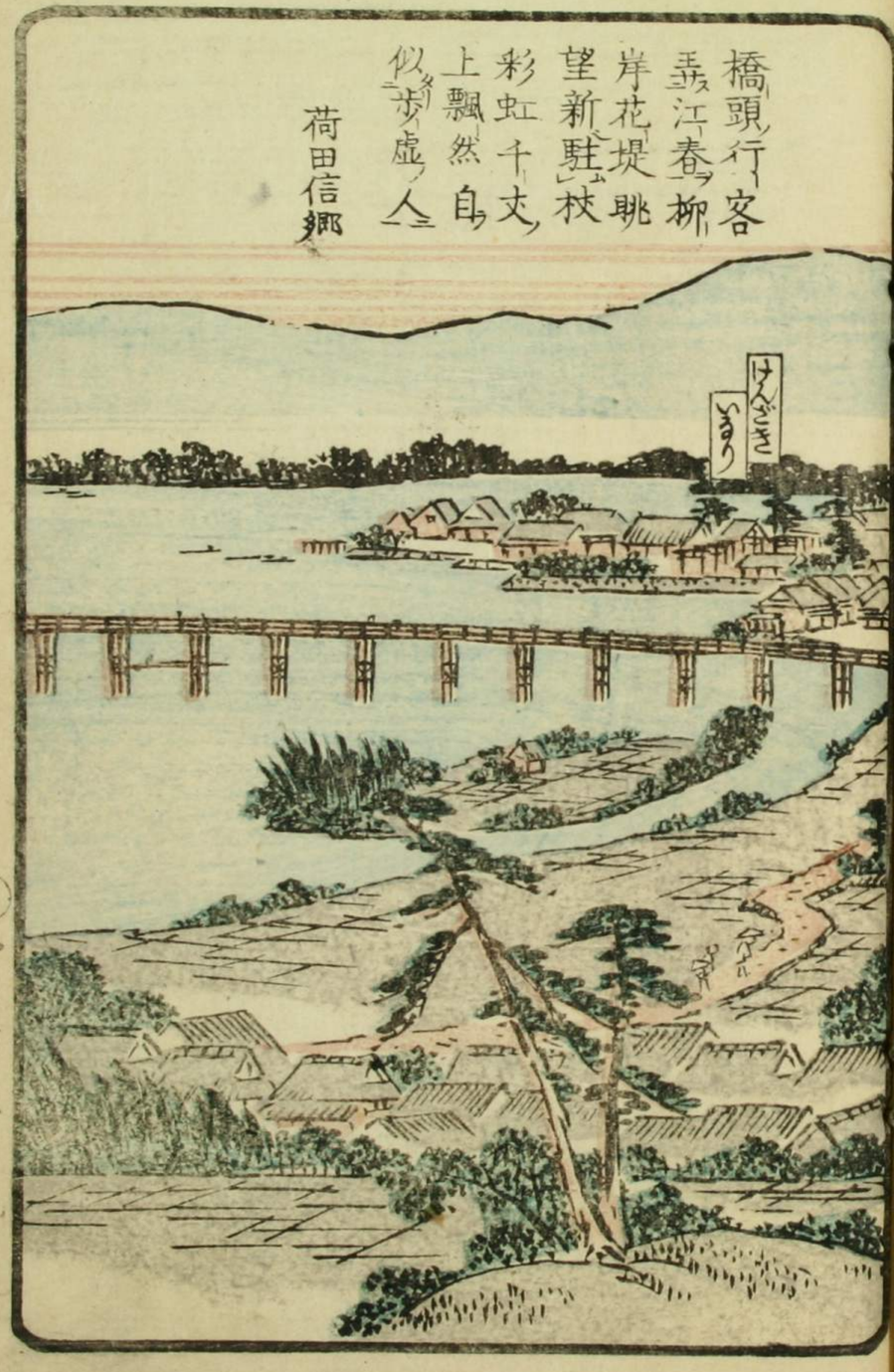
南廣野に趣きしなり然るに秀吉公の時此堤を築うせ

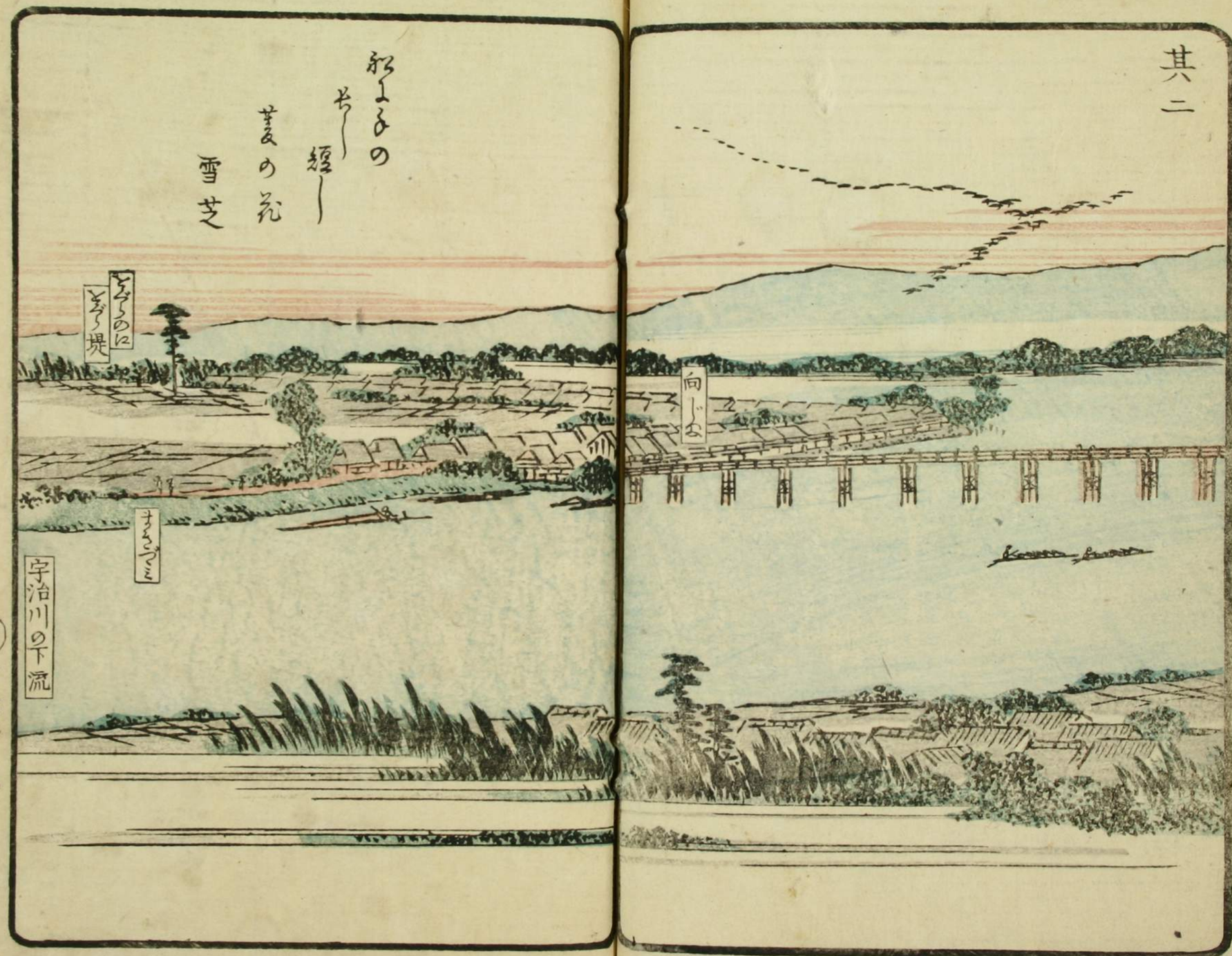
給ひしより大和往還の便宜なるて世人の知る所なり

豊後橋
向嶋
巨掠堤
巨掠江

橋頭行客
垂江春柳
岸花堤眺
望新駐杖
彩虹千丈
上飄然自
似歩虚人

荷田信郷





菱の花
雪芝

巨椋神社 街道のひがしこの方延喜式に出祭神春日明神 生土神 例年九月十日當所の杜和哥に詠ぶ

名寄 宇治山の紅葉の色とめかしこ哉とぞ思の杜の芝まるさよ 左近

巨椋入江 長サ二十九丁幅十五丁堤より西一円に概ね水面なり俗に巨椋の池と堤より東も池なり九池と甚称す東西一面の入江なりしを秀吉公の時堤を池の中に築きまゝ堤の左右に池もれて二所となれり

此入江に蓮河骨多く生じ夏月の花盛なるは殊さらに美観なり小舟に棹さしてあるに冷暑をとゝけ遊宴を催ふ雙びなし

冬は水鳥許多集まり且常に鱗もゝ〳〵生ずれば此辺の里民漁猟を業の地なり 図に云此入江の蓮葉蓮花に七月上旬に成れば残らず切りて京橋の精美舎に送る程なり

蓮花の景色を眺望せんと欲せば六月下旬より七月十日に至て見るべし

豊後橋南詰と東へ向て宇治橋まで九辛町

槙堤 此堤を下る 上流 目川 槙の流れの民村なり 槙の堤より つゞき一堤なり

槙堤とよぶなるべし是も秀吉公の時に築せり

上嶋より黄檗に渡る渡舟なり 俗に渡元の

常磐井 豊後橋の北詰より二町なり比常磐町 左馬頭源義朝の妻室常磐御前此所に住て世に伏見と称る双章なり後人これを名づけ平家物語に見る世に伏見と称る

常磐井は衰減して只清泉の名なり

豊後橋北詰より東江戸町までの地名なり山と指月山なり

指月 往来は六地蔵に通る往来

此所は伏見の勝地なり

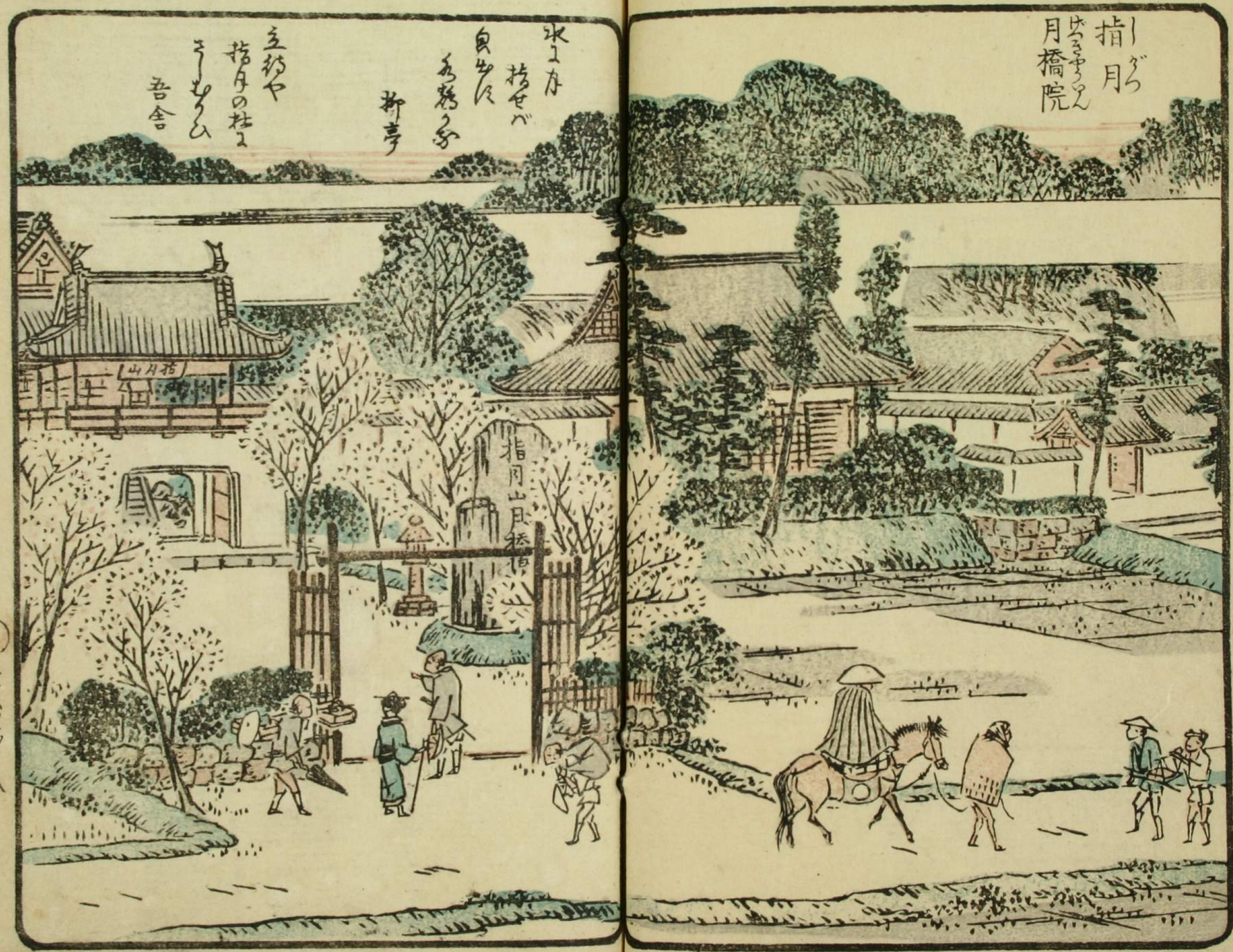
絶間なく西南に巨椋の紅潮なりて方一里の水面なり

宇治川の流水帯て通船の往来

指月
月橋院

水上は
指せば
良き人
乗り合
御亭

立ち寄や
指月の松と
そもそも
吾舎



月と愛とるに無双の景色にして古へより高貴の樓閣を営み
清質の悠々たると升澄暉の藹々たると降りの地なり

指月山月橋院　右同所にあり禪宗曹洞派越前府中金剛院の末寺なり
本尊毘沙門天は弘法大師作なりと此地は洛陽般舟院の
旧跡

観音堂　寺の西の五丁にあり　聖観音と安置　月見池　釈尊堂の前にあり

月見岡　指月の後山にあり一名宇治見山と称す秀吉公此所に樓臺を
築き月と賞し給へる古跡なり

宇治見山龍雲寺　右同所にあり此地は城山の内にして字と
本尊観世音　常憲院殿御念持佛にして石川三河屋安左衛門天台宗
備中守拝領して當寺に安置　大師堂　佛殿の東にあり元三大師
自作の像と云

當寺初は敦賀町にあり正徳年中珍興和尚中興して此佛刹を
開く所なり城山當寺のあるの方十町ばかりの桃の林にして弥
生の花の盛りなる紅艶の色と宇治見山よりの眺望
殊更よろしく早瀬を下る宇治の紫舟巨椋の池の水鶏鳥
羽竹田の行人淀の城廓八幡山崎の翠巒までも眼前に有
て騒人墨客の心を動かす

桃山天満宮　龍雲寺の西にあり祭神　渡唐天神の影像を鎮め奉る明徳
の頃沙門月溪靈夢営むあり其後應永元年に神影を同門
の僧忠庵に授る龍幡山藏光庵の鎮守　文録三年伏見の城
ときに移る時義光庵に嵯峨臨川寺のひがしに移る天祥の声
やまいにあらず山の天祥と称す

例祭六月廿五日

桃山 此辺は一円に城廓の古跡なり後世此丘に桃樹を数千株うゑて方十有余町の桃林となる程に弥生の花の盛りは紅艶の色をひらし天も酔る如く景なり遠近の遊客あれつどひて終日宴し紅日西山に没するとをしらず
これを伏見の桃見といふ

我衣にふしみの桃の雫せよ　はせを

松原山 桃山の東北にあり世俗御城山といふの城廓本丸の古跡なり今は古松鬱茂し翡翠として日を蔽ふの佳景なり当城は初め水渕大和守の城地なり豊臣秀吉公聚楽の城を秀次公に譲りて後佐久間河内守滝川豊前守佐藤駿河守水野亀之助石尾貞右衛門おに命じて文禄三年城をきづかせらる其後慶長五年石田三成が逆乱によつて城潰て丘となる今備後の国福山にある詞は天守は此城の天守なりとぞ此山の北に弘雪堀といふあり是は岡野弘雪の旧跡なりとぞ

梅谷 二ケ所あり一所は江戸町の東仙石谷の辺一所は五郎太町の辺両所ともに数千株の梅林あり早春の頃花魁の清香四方に薫じ風景又絶勝なりされば風流の好士ここに群来て詩をつくりこれを賞し遊宴に余念なきところは此所の一奇といふべし

大善寺 指月より八町ばかり東にあり六地蔵町といふ浄土宗当寺の本尊は幽霊菩薩は六体の其一にして此寺を源とし六地蔵の名とせり

本尊地蔵菩薩 仁寿二年小野篁冥土におもむき生身の地蔵尊を拝し蘇りて後六体の地蔵尊を彫刻して当寺に安置し後に保元年中平清盛西光法師に命じて都の入口六角の堂を営み此尊像を配りて安置せり

櫃川橋 六地蔵町の中にあり此ながれは大和街道にして金が辻より五箇庄を経て宇治橋本にいたる此川の水源は北山科小関の方よりながれて宇治川に落合ふ流によりて勧修寺川といひ或は小栗栖川ともいふ櫃川の名を称する明なり俊成卿の詠じ給ふは此所なり

木幡金ケ辻 六地蔵町より宇治にいたる札の辻といふ此辻より東は醍醐大津道南は黄檗宇治にいたる西は伏見淀道なり

木幡里 岡の屋の艮にあり此里は宇治黄檗の往還なり 木幡は旧号なり北は深草をかぎり南は岡の屋五箇の庄を限るいにしへの木幡の里といへは今の六地蔵の町なり 故人和歌にかぞへて此里にむかし馬をもて人まてといはるるもよをして

[illegible]人[illegible]馬[illegible]

山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行く君とたのむ　人九

紀貫之

[illegible]の[illegible]の里に宿とあるよ　俊頼

木幡神社　右同村路の小川柳大明神と号し祭神天忍骨尊[illegible]

或記云一[illegible]村に年の[illegible]毎に多く死[illegible]れば郷民[illegible]

[illegible]の神[illegible]柳明神[illegible]

[illegible]の神なるべきと思はざるべや　近衛應山公

木幡河　本宿の里の西に流る宇治川の支流にて六地蔵の[illegible]

又宇治川に入

いふせん人の[illegible]木幡川月はふれども流るるもの　家隆

五箇荘　木幡より黄檗に[illegible]四方と五の庄[illegible]山階庄　小野庄　木幡庄

伏見庄　宇治庄　是[illegible]件の中間にあれば斯[illegible]

弥陀次郎旧跡　五箇庄に[illegible]西方寺と号し

本尊阿弥陀佛は金銅の立像

来由云當國淀の東一口[illegible]悪次郎[illegible]漁師[illegible]産業の殺

生を常として邪見放逸の[illegible]ある時頭陀の僧[illegible]門戸[illegible]

悪次郎声あらく罵り[illegible]追[illegible]然るに尚[illegible]毎日毎[illegible]

門戸[illegible]悪次郎[illegible]怒り[illegible]再び[illegible]焼鉄[illegible]

彼僧の額に當て追放[illegible]僧[illegible]も怒色[illegible]次郎は

怪しく思ひて案ずるに考ふるに西山粟生野光明寺に入りて見へば
堂内の釈迦の像と弾ぜられ多くも尊像の額に焼鉄の火印
あり次郎忽ち懺悔心を発して佛道に入（是より声聞の釈迦と云ふ 今尚光明寺にあり）
又ある夜霊異を蒙りて淀川に網を入るに紫金の佛像を得たり
其後当寺の常照阿闍梨なん佛道修行して遂に
二人とも同日同刻に往生せりぬとぞ（世人悪次郎と名づけ弥陀次郎とよびたりとぞ）

岡屋（木津の西にありこの地ハ昔の彩屋村なり）

日暮るるに昔の蛍とぞなる明て渡らん橋の柱 遠人

長明方丈記に曰く跡の白波に身をよする朝の波に浮ぶ船とぞ
思ふ 淀川の船が船頭と云ふ

黄檗渡口（後に宇治の橋ハ黄檗の西の川岸より上流にあり）

黄檗山萬福寺（五ヶ庄の南三町許に大和田にあり黄檗山創建の
後ハ地名と黄檗と云ふ）

当寺開山隠元和尚ハ大明福州福清の人にて姓ハ林氏諱ハ
隆琦字ハ隠元なり 本朝承應三年に東渡し萬治二年公命
によりて山城国宇治郡大和田の勝地を賜ひ寛文元年九月
伽藍と草創し精舎の経営異風と摸し名て黄檗と云
同十三年四月二日 後水尾上皇より大光普照國師の号を賜ふ

六地蔵
大善寺

此寺の上方なる山頂に
小野篁の塚とぞ云ふ
こは贈一品伊豫親王の
巨幡の墓にて近畿或は
北域東二町西町南二町
五段北三町守丁一人と
載られたれども今千歳を
経てもなほ威矣なり
じゝ若誤て鋤を入れ
時の祟をなす事大なりと
況とやいふべしとや

大雄寶殿 釈迦佛の像と安置し 天王殿 布袋及び哭王韋駄天の像と安置し 法堂 宝殿の後にあり 威徳殿 法堂の後山にあり 帝王将軍家の祈願と安置し 祖師堂 達磨大師の像と安置し 選佛場 観音の坐像と安置し 牌堂 地蔵菩薩と安置し

伽藍堂 伽藍神の像と安置し 食堂 金奈羅の像と安置し 開山堂 隠元の像と安置し 隠元碑 開山堂の前にあり

舎利殿 佛舎利と安置し 浴室 食堂の後水尾院の宸影と安置し 華厳堂 釈迦佛と

藏經印板庫 佛殿の巽山上二町ばかり有一切経ならびに諸論釈の印板を藏む 藏経殿別の本殿に鐵眼和尚ちん按列羅漢を製し俗に黄檗饅頭と

名物唐饅頭 黄檗山の門前にあり 胡麻餡にして美味なり

普化墓 原普化禅師の異国の人なり世良庵と云う者其宗風を慕い事ら尺八を愛し四方に遊ぶ世の人これをもんで和朝の普化と称し

浮舟宮 普化より二町許南宇治道の右にあり源氏巻宇治十帖内なり 詳なれば俗に橋の古木なり浮舟の社なり

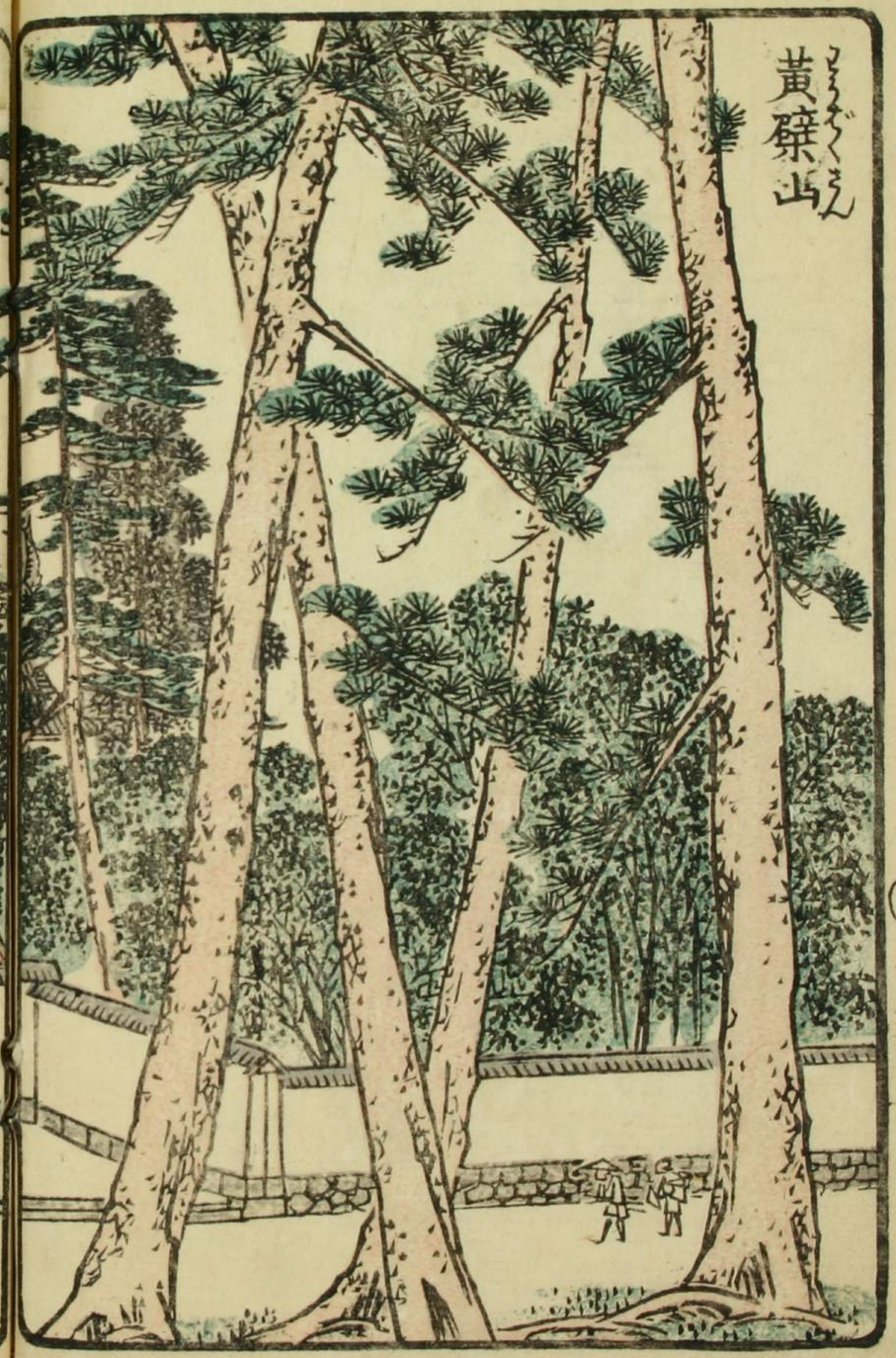
明星山三室戸寺 芙蓉より北丁許南大風寺村のうしろにあり 西国順礼第十番の札所なり

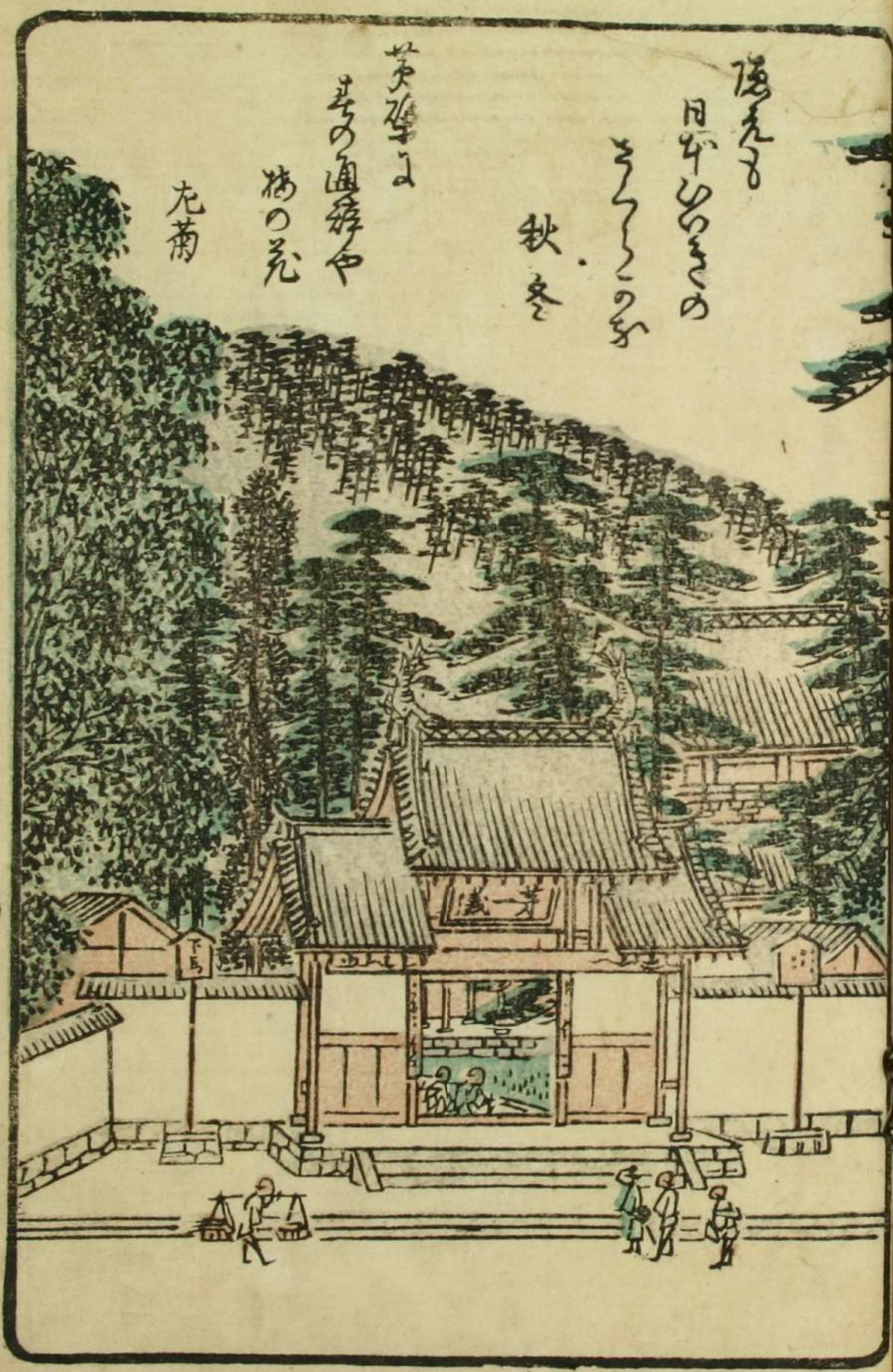
本尊聞浮檀金千手観音 立像長二寸 當山の東岩間の水底より出現したる像にして人王四十九代光仁天皇の御本願なり

智證大師の開基なり中興隆明阿闍梨なり

有範卿墓 本願寺内にあり有範卿は親鸞上人の父なり 頓阿法師も此地に居住のよし草庵集に見へたり今其旧趾定なるべし

草庵集 世の中をいとふるまに三室戸の庵室の


黄檗山


秋冬
花の光
花菊

滝つせ山ゆびこと世と宇治山の峰の松風　れい

三室戸山　三室戸寺の後の山とも

三室戸山のさくらづゝ紅葉つゝ有たてまつる　大職冠

宇治山　三室戸山のあなたの赤擬法師此法師とうん我庵ハ宇治山の昔の庵ゝ法師ハ世と絶れ世人よく考法

喜撰嶽　三室戸より二里ばかり巽にて静川村の山上にあり岩崛りてあれと赤擬洞と云ハ絶頂より赤擬法師登天しなんぞ

頓阿ゞ井蛙抄ゝ喜撰ゞ住家ハ三室の奥なりとゝ長明ゞ無名抄ゝハ三室戸のあゝ北余町ばかり山中へ入ゝ宇治山の喜撰ゞ住ける跡ハ今ハ

なけまとゞ堂の礎なゞ空ゝ有ゝ必ず尋ねてみるべき事ゝと書り

蜻蛉石　宇治の里大路方の南三町許ニ高サ地上五尺許幅ハ廣さ八尺ニて一尺四方ハ五寸許石面ニ方ニ観音の像と彫刻ゝ

宇治里　あつひの兎道　京師より行程四里ゝて宇治橋の東ハ宇治郡西ハ

久世郡　応神天皇第五の親王兎道稚郎子ゝ帝位と譲り

ゝ難く辞ゝて自殺ゝ宇治の宮と号ゝ兄大鷦鷯皇子ゝ譲り

ゝ又交帝の動きと位ゝ即ゝ宇治宮ゝ居ゝ天子ゝ変三

ゝ間ゝ遂ゝ宇治宮ゝ薨ゝ兄の親王即位ゝ

ゝ仁徳天皇と申ゝ又皇極天皇ハ大和國飛鳥宮より

近江の比良宮に行幸ありて宇治里に一夜泊らせおはし尾花を
かりて菴を造らせ行宮と形ばかりなれども是を宇治都とおぼし侍る

あきとてかりそめにすむ山の
住るに淚もぬれぬ

秋の野に尾花かり敷きやどれば兎狐の狐のうらぶぞ　額田王

おもかげかりしほさむ秋風ふきぬ　顕盛

抑宇治の名産は氷魚　鱸　鱣　鮒　圓材　茶磨　炭　爐の灰　等なり茶は
本朝の極品にて天下に名あり是は往昔栂尾の妙恵上人種を
異国より得まひ脊振山に栽ゑて是を岩上茶と名づけ

宇治

うぢ夫より宇治の風土茶園に可有ゆゑに後栽初め
宇治川　水源は近江国琵琶の湖より出で常に流れ石山黒津と経て
山とめぐり巖に觸れ宇治に流れ淀川に入
朝ぼらけ宇治の川霧絶えまに　定頼

宇治橋　大路方より宇治の左に丑寅より未申に架る長サ八十三間四尺余幅
三間其初は人王卅七代孝徳天皇の御宇大化二年に元興寺の道昭和尚
これを造るとも日本後紀に見へたり

宇治橋銘

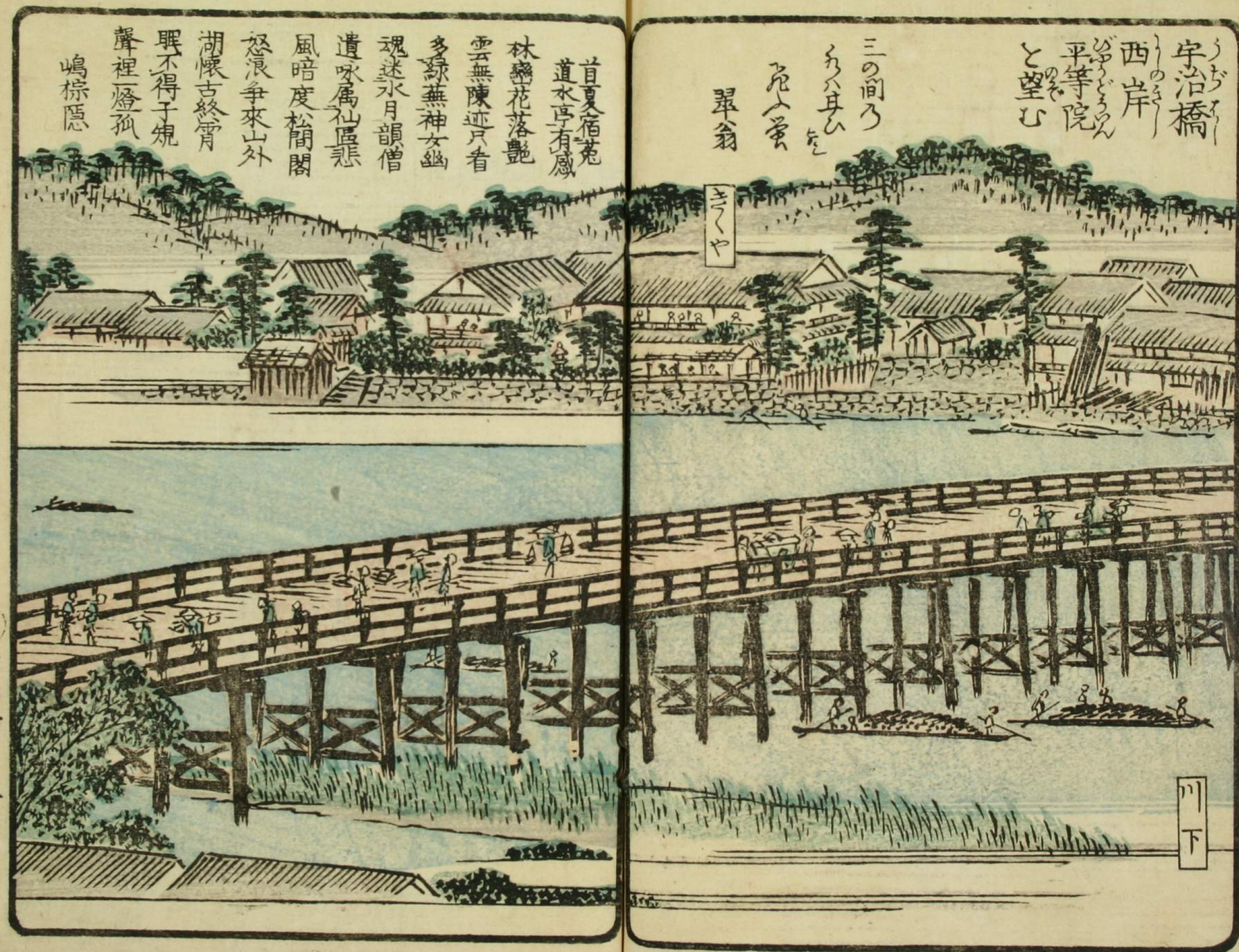
沉々横流　其疾如箭　條々往人　倚騎成市　欲逆重次
人馬亡命　従古至今　莫知枕葉　世有釋子　名曰道昭
大化元年　丙午之歳　攝立此橋　濟度人畜　即固微善
爰發大願　結因此橋　成果彼岸　法界衆生　普同此願
夢裡空中　導其苦縁

右は扶桑畧記に載せ撰者詳なり

宇治橋
西岸
平等院
と望む

三の間ろ
ろハ耳ひ
ほへと
翠翁

きくや



川下

首夏宿菟道水亭有感

林巒花落艶
雲無陳迹只看
多緑蕪神女幽
魂迷水月韻僧
遺咏属仙區悲
風暗度松間閣
怒浪争來山外
湖懐古終宵
眠不得子規
聲裡一燈孤

嶋椶隠

其二

東福寺通圓茶屋

平等院

橋畔煎茶

博士家春
山雨後摘
芳茗相迎
一榻留人
坐庭上清
風送落花

大江維翰

橋ち屋

宇治橋や夜半の河風更ふり下る水の音だけしく　家隆

宇治河は當國第一の大河にて此の橋を架初しより南方の喉口となる
夫より星霜を経て治承の橋を断て三井の法師共両岸の大軍を驚し
元暦の又橋を引く先陣を爭ふ承久の乱に及び代々の合戰に宇治
勢田の橋を引きと數回なり物かなり星移り豊臣の御代に至
の間の水と賞じ霞なびく紫紅の山吹の瀬とたゆ〻川辺の柳
弱なる紅の波に流れ〻ある山間よりの〻年魚を汲〻河の辺に
棹さしわたす蛍の光を奥ゆかしく美景窈窕として山水の

清暉とふく〻虹の影は河流に架し寔に當國南方の奇觀なり
古へ此橋ゝれより西に行しるり明衡往来に東よりのぞめば橋の中ゆ
橋西よりて見れば宇治の長橋云云

三間水 山城の名水なり勢田の橋下より流れ出る水也流れ来りて
又一説に竹生島弁才天の往檀の下より流れ出る云豊臣秀吉公
伏見御在城のとき常に此水と汲しめ給ふと云へり尚これを賞し〻汲
りの多し故に三の間の広き橋のまぐれと成くし水とくむの仮屋とし

通圓茶屋 橋の東詰に往来の人に茶を出して服し茶茗と
の名なり又屋上に御茶屋の額あり一休禅師の作なり通圓の孫なり一休の立
の間の水と汲しめ給ふの弱冠今尚存し学問に秀し尊恕親王の筆と世に秀吉公常に三
ようなるべし十八世に及ぶなり宇治橋寺普清の祈願所なり

橋寺 通圓の東にあり常光寺放生院と号し本尊地蔵菩薩角基の道昭和尚
公より所伝なり其後興聖菩薩に橋供料を

離宮八幡宮 橘寺の南にあり祭神三座にして上の社は應神天皇仁德天皇下の社は菟道の尊を崇め奉る平等院の鎮守にして宇治郷の生土神

神輿三基 例祭五月八日

叡社と當社のみなり離宮の摂社なり

當社を離宮と号とも本は此地を宇治宮といひ故自然の称号なり

又一説に此社の神は民部卿平忠文なりと則此地忠文が別荘

朱雀院の御宇承平三年三月平將門征伐のとき秀郷貞盛忠文等を將軍として

たまひ將門を追討せしめ給ふ勅賞の次第ありて小野宮左大臣

清慎公に賞せられ給ひきと行はれとやされ給ひ九條右大臣実頼公のこまゝ

中ゝ刑の賞にあらずとて沙汰なし賞のなくばとて彼へ

中されれども忠文其さとなりたまひ忠文本意なきことにおもひ

給ふ故に八月の比手の甲まで通りて血は紅と成りて断食して死す其後

悪夢とうるべき祟りとなれば小野の家にて夢を見

めんとも祈りしかども宇治の郷の氏明神とぞ後冷泉院の御宇

治暦三年十月七日正三位とぞ授け給へり